

(別紙1)

論文の内容の要旨

氏 名	竹内詩織		
論文題目	ローカリティ概念の理論的再考察 ーノンモダン視点からみる大河ドラマ分析ー		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	委員長		
	委 員		
	委 員		
	委 員		
	委 員		
	委 員		
内 容 の 要 旨			
<p>本研究はNHKの「大河ドラマ」のなかから、東北や沖縄、そして南洋を舞台とした作品に焦点をあてて分析を行ない、ドラマ内でのローカリティやナショナリティに関わる部分の特徴を明らかにすることを通して、従来のローカリティ概念が内包していた問題点を指摘し、その作業と並行して行なってきた先行理論の考察と結びつけることで、ローカリティ概念を、より過程論的なかたちちに組み直し、現代の文化現象をよりの確に分析する理論的な展望を拓いたものである。</p> <p>本論文は、研究目的や問題意識、議論展開の方向性を記した序章と、先行研究の考察から導出された課題やそれを受けて新たに展開される考察の理論的な地平を示した第1章からなる第一部、そして第一部で予告された理論的な地平に、いくつかの社会学的概念を取り込みながら、「ローカル、ナショナル、グローバル」なものがどのように大河ドラマ上で構築・表現され、またそれらが現実の社会にどのような影響を与えたかを、先行研究とは異なる新たなかたちで解釈した第二部（2章から6章）、そして6章までに用いた概念を第一部で提示した地平で総括し、新たなローカリティ概念の有効性とそれに基づいた大河ドラマ分析の意義を再確認した終章の第三部からなっている。</p>			

以下で、各章の概要を述べる。

序章は、1980年代を中心としたナショナリズム研究をローカリティ研究へと接続するための予備考察にあたる。そのためにまずナショナリズムに関する先行研究の潮流との連続性あるいは本論文の問題意識との距離を示す部分となっている。ホブズボウム、アーネスト・ゲルナー、アントニー・スミス、ベネディクト・アンダーソンらの研究におけるナショナリズム概念を整理・検討した後、ベネディクト・アンダーソンの「想像の共同体」論の視点を受け継いだ人類学者アルジュン・アパデュライのある指摘に申請者は着目する。それは、グローバル化が進行した現代においては、ローカリティを常に問いつつナショナリズムを考察する必要性の指摘である。つまり、想像の産物としてのナショナリズムとの対比で実体としてローカリティを捉えるだけではなく、ローカリティもある意味において想像の構築物であり、そのあり方がナショナリズムやグローバリズムとダイナミックに連動しているという議論である。アパデュライはグローバル化時代のローカリティは、何かと近接しているというコンテキストと、自らの「範域」を拡張しようとする力（アパデュライはそれを「植民地化」と称する）を二要素として持つと述べている。

しかし申請者は、こうした議論を実際の分析視座として用いる場合にも、ローカリティを具体的に論じる場面では、それが近代化によって国民国家に統合・解消される前姿としての「伝統」、あるいは近代化やグローバル化が作り出すシステムにおける「中心と周縁」、さらにナショナリズムへの「抵抗」としてのローカリティといった二項対立的な前提に回収され、ポストモダン状況とも称される現代の分析概念としての有効性を失なつつあるとみる。

そこで申請者は、上記の理論的潮流とは異なる分野から、こうした窮状を打開する認識論と方法論のセットを提出する。それが、ブルーノ・ラトゥールが提唱するアクターネットワーク理論（略称ANT）である。ラトゥールらの唱えるANTは、近代化論や機能主義、あるいは中心周縁論、あるいは科学的であることを無条件に称賛する立場のような、先に大きな社会認識や価値観を用意し、それに現実の事象や下位的な概念を当てはめて社会現象を説明する、いわゆる決定論的な立場を批判すると同時に、真実なるものを無条件に疑う脱構築的考え方も批判する。そして、人やモノ、出来事をできるだけそれらに即し、ネットワーク（つながり）という視点から非決定論的に記述、解釈する方法論を提唱する。そしてこうした方法の拠って立つ認識の地平をラトゥールはノンモダンと呼ぶ。こうしたANTの議論は科学社会学や技術と社会の関連に関する研究などで多くの新鮮な成果をあげてきている。

つまり申請者は、アパデュライが拡張した、ナショナリズムと連動したローカリティへの問題意識を評価しつつ、かつ従来のローカリティ観の背後に存在した近代化論的な社会認識、決定論的な解釈傾向の代替としてANTを接合することで、ノンモダンという認識地平と人・モノ・ことのネットワークとして対象を捉える方法論をもつ、ローカリティを捉える新しい本論文の視座を示す。

第1章は、ラトゥールの議論のなかでもあまり注目されてこなかったノンモダンという概念を明確に説明するための章である。ここでは、ある戯曲のストーリーを題材に用いて、物語のなかであえて対立を作り出すことで、かえって二項対立に収まらない領域を暗示し、それがその作品の魅力となっていることが示されている。ノンモダンの地平においては対立も一種の演出として機能し、それが人々にたいして様々な効果を発揮しえる、というその説明から、ローカリティやナショナリティが相互関連的に発現し人々にたいして作用する動的な過程分析の有効性を示唆した。

第2章では、堺や南洋（ルソン）が舞台となった大河ドラマ『黄金の日』(1978)を、前章のノンモダンの視座から分析した。この章では、観光社会学者ディーン・マキャネルの諸概念も援用され、（地域博物館など）見ることのできる場所とそれ以外の（見られない）場所、あるいは本土（堺）と、南洋など、二つのカテゴリーが作られることで二項対立が演出され、その結果堺においては、「自由都市・堺」というローカリティが観光的ローカリティかつ地域イメージとして発現していることを示した。

第3章では、第2章の分析のなかで考察しきれなかった歴史上の人物がローカルな表象として構築され、それがやがて視聴者によって各自のアイデンティティに引きつけられたアクチュアルな存在として受け止められていく過程の分析を、東国（関東地方）を舞台とした大河ドラマ『風と雲と虹と』(1976)を事例におこなった。ドラマの内容に加え、当時の社会状況や平将門ブームに関する新聞記事などを用いた考察の結果、将門のイメージは神格化され、またそれと並行して視聴者の側がそれを各自にとってアクチュアルな存在へと引きつける過程が働き、その結果、東国だけでなく国民のヒーローという、ローカルとナショナルをつなぐ歴史表象に変容していく過程を記述した。

第4章は、大河ドラマ『琉球の風』(1993)を用いた沖縄の事例分析である。まずこの物語が中国沿岸部や台湾を含めた広い世界を舞台にしたものであり、原作からドラマ脚本化への過程で琉球という場所のステレオタイプ化がなされることが確認される。次にこの大河ドラマ放映後にロケ地テーマパークが作られたこと、そしてその存在が、再建された首里城の真正性をかえって高め、ステレオタイプな沖縄表象の強化へとつながっていく過程を当時の新聞記事や評論などを資料として考察している。ここでもローカルなものはナショナルやグローバルと相互作用しながら揺れ動いていること、また非真正な場所が現れることで他の場所の真正性が増し、また非真正性は人が真正性を探し求める動機を誘発することが示された。

第5章は、東北を舞台にした大河ドラマ『炎立つ』(1993-1994)を用いて、個人のアイデンティティの次元から選択的なローカリティの在り方やその性質とそれが生成するための必要条件について考察した。『炎立つ』では、のちに偽書と判明した『東日流外三郡誌』に影響を受けた誇大妄想的な古代東北が描かれる。東北に住む視聴者にとっては古代の東北こそが日本の中心であることが地域の誇りであり、東北外の視聴者は古代東北に原日本を見出すことにロマンチズムを感じたことを、当時の三郡

誌ブームに関する新聞記事や東北ユートピア論系の一般書、さらに原作者の発言資料などから明らかにした。そして、ローカリティとナショナリズムの接点で起きているこうした現象は、ローカリティが異質な他者と隣り合う「近接」と、他者を同化する「植民地化」というアパデュライの議論にもあてはまることを指摘した。

第6章は、再び『琉球の風』を事例に、中央と周縁といった二重構造を作り上げる「モノ的なもの」として大河ドラマや首里城が読み解かれる。ここでは、ANTと親和性を有するある論者（ミシェル・セール）の、モノ的な効果を発する対象を広く指す「準—モノ」という概念が援用される。首里城を創り上げたり、琉球の歴史が博物館や各種のメディアで「復元」されていく過程が、同時に「中央と周縁」という二項対立図式をも生成していくこと、それは琉球王国内部にも中央（本島）と周縁（八重山）という図式を作り出していくのであり、準—モノはその過程でそれと人との関わり（例えば、ある個人が「中央の側」の人間か「周縁の側」の人間か）を決める効果を発揮することを示した。

そして終章では、第6章までの知見や各章で援用した概念を総括的に論じ、ローカリティの能動性に注目を促すと同時に、ローカリティの生成に関わるコンテクストが常に多様な結果をもたらす理由として、つねにグローバルやナショナルとローカルをめぐる意味の動的で複雑な過程であることを再確認する。また、そうした視座によって、現代におけるローカリティの様々な発現や世界・国家・地域・個人など様々な次元で発揮される効果を分析の俎上に乗せることのできる視座であることを改めて確認して結論とした。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏 名	竹内詩織		
論文題目	ローカリティ概念の理論的再考察 ーノンモダン視点からみる大河ドラマ分析ー		
審査委員	区分	職 名	氏 名
	委員長		
	委 員		
	委 員		
	委 員		
	委 員		
	委 員		
要 旨			
<p>本研究は社会学および周辺の学術領域で広く用いられるローカリティ概念を再検討し、情報社会化、消費社会化が浸透した現代社会の有効な分析視点として再提出することを目指した論文である。議論を展開していく「場」として、多くの人々に親しまれてきたメディア・コンテンツであるNHKの「大河ドラマ」が選ばれている。申請者はそのなかから、東北や沖縄、そして南洋といったいわゆる「周縁」を舞台とした作品を選定し、ドラマ内でのローカリティの描かれ方の特徴を明らかにし、同時に作品に関する新聞資料、制作者の発言、さらにロケ地の現地調査などを含めた分析から、それらの物語が背景にもつナショナリズム、グローバリズムとの関連を指摘することを通して、従来のローカリティ概念が内包していた様々な先入見や理論的問題点を明らかにした。さらにその作業と並行して行なった理論的考察を、前述の成果と結びつけることで、従来とは異なるローカリティの解釈、すなわち、より動的（社会過程論的）な組み直しと、より広い理論的地平のもとに置き直すという試みを行った。こうした構想やその作業自体が、従来の研究には見られなかった独自のアイデアを多く含んでいる。</p> <p>以下でそれらのいくつかを示す。</p> <p>まず、従来のローカリティ研究は、コミュニティ論に代表されるような比較的狭い範囲の地域研究や、フィールドワークに基づいて、ローカリティを所与のもの、かつ</p>			

一種の独立した概念として読み解く研究が少なくない。しかしナショナリズム論の潮流の側から、アパデュライを媒介としてローカリティ概念に接近した申請者の手法は、ローカリティ研究として特徴的であるといえる。

またローカリティ概念が現代社会の分析ツールとして抱える難点の理由として、近代化論的認識が前提に存在することを指摘した点や、その難点を解消するために、非決定論的アプローチで知られるアクターネットワーク理論（ANT）、特にラトゥールの議論を導入した点は、独創的である。こうした試みが成功していることは、申請者が執筆した、本論文の一部を成す論考が、理論社会学分野の学会誌に高い評価をもって掲載されたことによっても確認できる。

こうして申請者は、コミュニティ概念の背景にあった近代化論的先入見を相対化した分析視座の有効性を示すため、あえて東北や沖縄、南洋といった「周縁」を舞台にした大河ドラマを選び、従来のステレオタイプの解釈とは大きく異なるドラマ解釈と、理論的知見の接合をおこなった点が高く評価できる。

申請者がこうした着想にいたった契機は、大河ドラマが、視聴者に日本という国家の歴史を実感させる「国民の物語」としてのナショナルな効果をもつ一方で、地域のまちおこしや観光キャンペーンの資源として用いられるローカルな効果も有しているという点であると論文中で述べられている。こうした小さな気づきを学術的な問題意識へと昇華・展開し、ドラマ解釈に加えて、実際に沖縄や堺などの現地での資料調査やロケ地の実地調査を行ったことは、高く評価できる研究姿勢である。またそうして収集した背景情報を十分にふまえたうえで、論文執筆時には、自らが提唱した理論的視座を明解に示すため、理論的な説明とドラマの解釈に絞って論文を展開し、主張の一貫性がよく伝わる論文として書きあげた判断力と力量も評価できる点であろう。

このように独創性の高い意欲的な研究論文であるが課題も残されている。たとえば学際的に論文を渉猟した結果、それぞれの理論や学説について系譜的理解が不足している点、特にコミュニティ論の読解作業に少し不十分さを残す点、ドラマ分析において視聴者や地元の人々の視聴経験に関する分析が相対的に弱い点などである。

しかしながら、先述のように本論文の主たる目的とそのための記述戦略を考えると、こうした欠点は首肯できる範囲内にあり、本研究は、著名なテレビコンテンツを素材にしてローカリティ研究の批判的再構築を行う、という狙いを十分成し得ていると判断できる。

なお、申請者は、社会学理論の学会誌『現代社会学理論研究』に査読論文を掲載されているなど、複数本の論文が学会誌に掲載されており、本専攻社会・地域学講座の学位申請要件を満たしていることを確認した。

よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。